

「室内空気質のリスク評価」

エリザベス L. アンダーソン, ロイ E. アルバート 編
内山巖雄/池田耕一/横山真太郎 共訳

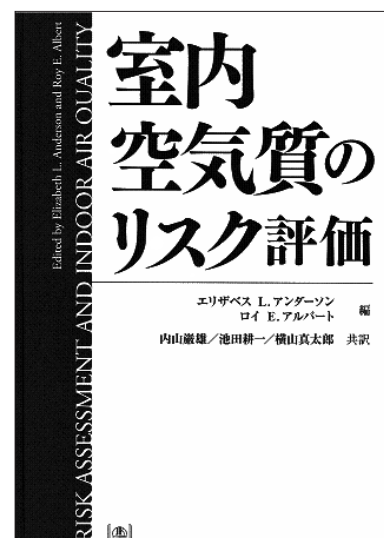
B5版, 244ページ, ¥4,000
(アイ・ケーコーポレーション発行, 2004年8月20日発行)

近年, 建築環境における室内空気汚染の問題に社会的な関心が集まっている。室内空気質を適正に制御することは重要であり, そのために環境基準が制定されている。在来の環境基準は“用量-反応関係(dose-response relationship)”に基づいており, 閾値が存在することを前提としている。例えば, 食品添加物, 残留農薬などの1日許容摂取量は一般的に閾値の100分1として決められて来た。しかし一方, 発がん性物質のような閾値のないものについては, その基準を決めるのに新しい手法, 即ちリスクアセスメントが必要となった。リスクアセスメントについての研究は1970年代から欧米で盛んに行われ, 1986年にアメリカ環境保護局から公表された「発がん性物質のためのリスクアセスメントガイドライン」が脚光を浴びた。

リスクは“被害の度合い”と“被害の起こる確率”の積として表される。“被害の度合い”は大きい, “被害の起こる確率”は低い発がん性物質, 逆に, “被害の度合い”は小さい, “被害の起こる確率”は高いかびのようなものは私たちの生活環境の中に多く存在している。このような物質をどのように規制すればよいかは大きな課題となっている。

本書は, 内山巖雄先生(京都大学教授, 元 日本リスク研究会会長, 元 国立公衆衛生院労働衛生学部部长), 池田耕一先生(当学会会長, 国立保健医療科学院建築衛生部部长), 横山真太郎先生(北海道大学教授)が共訳したものであり, 下記の10章から構成される。リスクアセスメントの基礎, 判定方法, 応用などについて詳細に分かりやすく書いている本書は, 土木工学, 建築家, 建材メーカー, 商品生活メーカー関連の方々にとどまらず, 室内環境関係を勉強している大学生, 大学院生, 一般の居住者にとっても有用な図書である。一読をお勧めしたい。

- 第1章 リスクアセスメントへの序論
- 第2章 人の健康リスクアセスメントのための要素
- 第3章 室内空気汚染物質の有害性の同定
- 第4章 用量-反応評価
- 第5章 曝露の判定
- 第6章 リスクの総合判定
- 第7章 不確実性の判定
- 第8章 室内空気汚染物質の測定
- 第9章 リスクアセスメントの応用
- 第10章 リスクアセスメントの展望



(国立保健医療科学院 建築衛生部 建築物衛生室長 柳 宇)